

# ルソーの影響

馬場昭夫

## <目次>

### 序

一、ルソーの位置づけについての見解

二、ルソーの影響

1. ルソーとカント
2. ルソーとロベスピエール
3. ルソーとベッカリーア

### 序

近代刑法学の祖といわれるチェーザレ・ベッカリーア<sup>1)</sup>はジャン・ジャック・ルソーの影響を受けていた<sup>2)</sup>。

ルソーは人間の歴史において、極めて有名であるけれども、その思想史上、歴史上の位置づけは、定まっているとはいえない。むしろ混乱、混迷、困惑しているといっても過言ではない。

ルソーについて知り得たことを整理し、ルソーの影響を考えてみたい。

一、ルソーの位置づけについての見解

#### 1. 岩崎武雄「西洋哲学史」

フランス啓蒙哲学の中に位置づけている。しかし、「フランス啓蒙時代の中で特殊の位置を占めるのはルソーである。ルソーは主知主義に対して鋭く反対し、自然と直接的感情を重んじこれを阻害する文化は悪であると考え、自然の状態をもって理想であるとしたのである。それ故、ルソーは人間および社会をできるだけこの自然の状態に近づけることが必要であると考えた。しかしこのようなルソーの思想が、啓蒙思想に反対しつつも、現実の文化に対して理想的状態を対立させ現実の文化を容赦なく批判したという点ではやはり

啓蒙思想の特徴を備えているものであり、かれの思想がフランス革命の原動力となったといわれるのも至当であるといわねばならない。」とする。

## 2. 岩田靖夫、坂口ふみ、柏原啓一、野家啓一「西洋思想のあゆみ ロゴスの諸相」

フランス啓蒙思想家の中で扱われ、「モンテスキュー、ボルテール、コンディヤック、ラ・メトリ、ディドロ、ダランベール等の啓蒙思想に対する批判的な反省者であるが、他方でフランス革命の精神的指導者ともなったように啓蒙主義の完成者でもある。」とされる。「ルソーにとっての啓蒙とは、知識や文化の汚染を極力おさえて自然に帰ることである。自然復帰の具体的な方策は、知性や理性を重く見る傾向にかえて、個人レベルでは情操（sentiment）を育てることであり、社会レベルでは一般意志（volonté générale）に注目することである。」「ルソーは、真の自由と平等の実現のための制度として、エゴイズムの合理化たる代議制をとるよりは、「社会契約説」（1762）に見られるように一般意志へと権利を委譲する契約の立場をとることになる。」とされる。

しかし、はたして、ルソーの思想が、モンテスキューの「法の精神」に対する批判的反省で、完成しているのであろうか。ヴォルテールの理性尊重、進歩尊重に対して批判的反省して完成しているのであろうか。ヴォルテールとルソーは個人的にも、俗な表現ではあるが、徹底的に仲が悪く、けんかしている。前記他の人達に対しても同じような疑問が呈しられる。ルソーがフランス革命の精神的指導者になったことは否定できないが、啓蒙主義の完成者と言えるのであろうか。

## 3. 中埜肇（なかのはじめ）「西洋近代哲学史」（放送大学教材）

反啓蒙的文明批評家としてのルソー という標題の下で扱われている。「啓蒙思想と同じく、「人間」と「自然」との立場にもとづいて現存の政治・社会・宗教・道徳を鋭く「批判」し、またある程度は「哲学者たち」と協力しながら、しかも、啓蒙思想が無条件に認めていた「知性」・「文化」・「進歩」の観念に対して根本的な疑念をつきつけたのがルソーである。」「ルソーの自然観・人間観・国家観は、啓蒙時代の思想家たちのうちで、スケールも最も大きく、ある意味で最もラディカルであった。それだけに、彼の思想はその後のヨーロッパ思想の全体にわたって大きな影響を与えた。」

## 4. 式部久他「高等学校倫理」

啓蒙主義の説明の中で、次のように位置づけている。「宗教や伝統にとらわれない立場で社会の制度や慣習を検討し、理性に基づいて、自由で平等な社会をつくることをめざした思想運動。イギリスのロックに源を発し、フランスのヴォルテール、ルソーなどに受けつがれた。」

## 5. バートランド・ラッセル「西洋哲学史」

「彼は浪漫主義運動の父であり、人間の感情から非人間的事実を推論する思想体系の創始者であり、伝統的な絶対君主制に反対して擬似民主主義的な独裁制を説く政治哲学の創案者である。ルソー以降、みずからを社会改革者と目するひとびとは、二つのグループ、すなわちルソーに追随する者とロックに従う者とにわかれてきた。時には両者は協力したのであり、両者が互いに相容れぬものだとは考えない個人も多くいた。しかししだいに、その不両立性はますます明白となるにいたった。現在では、ヒットラーはルソーの帰結であり、ルーズヴェルトやチャーチルはロックの帰結である。」<sup>3)</sup>

## 6. 桑原武夫編「ルソー研究、第二版」

ルソーについての統一的評価はない。極めて矛盾した著述、人格との指摘が多い。

## 7. 吉岡知哉「ルソーの政治思想に関する一考察」（国家学会雑誌93巻5，6，7，8号，94巻5，6号）

「思想とは何であるか、思想は何を為しうるか、ということが啓蒙思想の最も重要な問いであるとするならば、その意味では、ルソーはまぎれもなく、啓蒙思想の嫡子である。しかし、ルソーは、この問いを究極まで押しすすめることによって、啓蒙思想自体を突き破ってしまった。」

## 8. 福田敏一「ルソー（人類の知的遺産40）」

「近代的知性の批判者としてのルソーの魅力は、今では近代の放出した巨大な生産力を前提に考えられた社会主義への幻滅とさえ結びついている。」

## 9. 木村雅昭「ユートピア以後の政治」

「近代のユートピア思想の潮流で、J・J・ルソーは特異な光彩を放っている。ルソーの思想体系を貫くものは、人間と社会との理性的覚醒を通じて、国家ないし権力的契機を廃棄せんとする、強力なパトスにほかならない。」「ルソーの教説には、現存する社会と国家の虚偽性、非倫理性を激しく弾劾する一方、うるわしい理想社会をうちたてようとするパトスが脈々と流れている。そしてそれはフランス革命のさなかで急進的な民主主義思想を支えたばかりでなく、その後のユートピア思想、なかんずく社会主義、共産主義の思想と運動の中でも決定的な役割を演じていた。周知のようにK・マルクスが、人間を「類的存在、と把握する一方、現実の個人がエゴイズムに支配されていることを論難するとき、以上のようなルソーの立場が、はっきりと投影されている。」「もとよりルソーが強調し

たように人間のうちには、他者と連帯し、他者の幸福を希う傾向が本来的にビルト・インされている。したがって、自他の分裂、あるいは市民社会のエゴイズムに対するマルクスの告発も、それじしんきわめて正当なものではある。しかし彼らが自らの理想を政治の場で、政治権力を後楯として実現しようとしたとき、そこにきわめておぞましい社会が出現してくることとなったのである。それは政治の世界に固有の暴力性によって、彼ら本来の目的が不断に換骨奪胎された結果、出現してきたものにはかならない。もっともマルクスは（そしてルソーもまた）権力ないし暴力に潜む悪魔的な作用にからきし無関心であったわけではない。しかしながら人間が、全くあらたなる存在へと生まれ変わる時、そうした悪魔的作用も雲散霧消してゆくにちがいないととらえられていたのである。この意味で共産主義の歴史は、あらゆるユートピア運動につきものの陥穽をなによりも表わすものにかならない。そしてまたそこにこそ共産主義の悲劇の根因があったといえよう。」

## 二、ルソーの影響

1750年、ルソーは「学問芸術論」を公刊する。それまでの長い放浪と独学の時代における、個人的な交友を通じての影響から、一転して著書による、名声を背景としての影響の時代に入る。1755年「人間不平等起源論」、1761年「新エロイズ」、1762年「社会契約論」「エミール」の公刊は賛否両論でむかえられる。「新エロイズ」は大衆小説として広く熱狂的に読まれた。これらの成功にもかかわらず、ディドロ等旧友との仲違い、ヴォルテールの酷評を原因とするヴォルテールとの対立、「社会契約論」「エミール」公刊後のフランス、ジュネーヴ政府、キリスト教界の迫害、亡命先のイギリスでのバーク、ヒュームとの仲違い等によって、ルソーは孤立する。このような時代にあって、心からルソーを敬愛し、受け入れた人々がある。その中で、カント、ロベスピエール、ベッカリーアについて追ってみる。

### 1. ルソーとカント

1762年5月、ルソーの「エミール」が公刊された。6月、逮捕を避けてスイスに逃れ、以後、転々とする事となる<sup>4)</sup>。ドイツ北東部ケーニヒベルクにいたカントは、出版後間もなく発売禁止となった「エミール」と「社会契約論」を、早くも同年夏には入手して感激して読むことができた。カント38歳の時である（ルソー50歳）。カントはケーニヒベルクのカンター書店に間借りをしていたが、この書店主は、書籍の出版販売のためヨーロッパ各地を旅行し、最新の出版情報に通じていた。1760年代のカンター書店は多数の内外の新刊書を市民に提供して、ケーニヒベルクにおける新思想の窓口の観を呈した。ルソーの発禁書のカントへの供与はその一例だったのである<sup>5)</sup>。

カントは「エミール」を読んで大きな衝撃を受けた。それは現在では「美と崇高の感

情に関する考察」のための覚え書き」の中で、なまなましいメモとして残っている<sup>6)</sup>。

- ルソーの書物は、老人を感化するに役だつ。
- ルソーは総合的なやり方をし、自然的人間から始める。私は分析的なやり方をし、開化した人間から始める。
- 現代の道学者は多くのものを禍悪として前提し、これを克服することを教えようと欲する。また悪への多くの誘惑を前提し、これを克服する動因を指示する。ルソーの方法は、前者を禍悪と考えず、したがって後者を誘惑と考えることのないように教える。
- 子どもがどのようにして将来みずから生きるべきかを教えるために生涯の大部分を過ごすということは不自然である。そこで、ジャン・ジャック（ルソーのこと）のような家庭教師は作為的である。素朴な状態においては、子どもに対してあまり世話をしてやらない。子どもは、わずかな力でもつやいなや、自分で、ささやかではあるが有用な、おとなの行為——農夫や職人におけるような——をなし、しだいにそれ以外のことを学ぶものである。ひとりの人間が同時に多くの人に生きることを教えるためにその生涯をもちいるのはよいが、彼自身の生涯を犠牲にするのは敬服すべきことではない、ということ、しかしながら、適切なことである。したがって、学校は必要である。けれども、学校が可能となるためには、エミールを教育しなくてはならない。ルソーが学校の起源を示すのが望ましいことであろう。いなかの教師は、このことを、自分自身の子どもや近所の子どもから始めることができよう。
- 悟性に対して趣味をもつということは重荷である。私はルソーを、ことばの美しさもはや全く妨げとならなくなるまで読まなくてはならない。そのとき、はじめて、私は、彼を理性をもって調べることができる<sup>7)</sup>。
- 単に虚栄や気晴らしだけのために読むのでない思慮ある読者が、J・J・ルソー氏の書物から得る第一の印象は、なみなみならぬ精神の聡明さと、天才の高貴な精神の高揚と、情緒豊かな心とが、おそらく、どのような著者よりも高い程度に見いだされる、ということである。たとえ、その著者が、どのような時代、どのような国民に属しようとして、また上述のものを、すべてもっていたとしても。これにすぐ続く印象は、奇異で不合理な見解についての不審の念である。この見解は、一般の考えには全く対立しているので、人々は次のような推測に陥りやすい。すなわち、著者はその特別な才能により、雄弁の魔力を証明しようと欲しただけであり、また、魅惑的な新奇さにより、機知の全競争者の間で目立つ変人ぶりを示したかっただけである、と。
- 私自身は、好みからすれば学者である。私は、認識に対する非常な渴望と、認識においてさらに進みたいという貪欲な不安を感じるのであるが、また〔認識を〕獲得するごとに、満足をも感ずる。これだけが人類の光栄となるであろう、と私が信じた時代があった。そして、私は、なにも知らない民衆を軽蔑した。ルソーが私を正してくれた。この

眩惑的な特権は消滅し、私は人間を尊敬することを学ぶ。そして、もし私が、このような考察は他のすべての人々に人間性の権利を回復するという価値を与えうるということ信じないならば、私は普通の労働者よりもはるかに役にたたぬ者であろう<sup>8)</sup>。

- ニュートンは、彼以前には、無秩序と乱雑な多様性しか見いだせなかったところに、秩序と規則性とが偉大な単純さと結びついているのを、はじめて見いだした。そして、それ以来、彗星は幾何学的な軌道を描いて走っている。

ルソーは、人間のさまざまなかりの姿の中に、深く隠された人間性と、隠れた法則を、はじめて発見した。この法則に従い、これを守ることにより、摂理は義とされる。それ以前には、なおアルフォンソとマーニーの異説が通用していた。ニュートンとルソーにより神は義とされ、いまやポープの命題は真である。

- ルソーの主目的は、教育が自由となり、したがってまた自由な人間を作ることである。
- ルソーの教育は、公民的社会を助けてふたたび隆昌せしめる唯一の手段である。なぜなら、困窮と、階級の抑圧および軽蔑、ならびに戦争が発生するゆえんのぜいたくが、ますます増加しているので、スウェーデンの場合のように、これに反する法律はなにも達成できないから。これにより、統治もまたいっそう整然とし、戦争も少なくなる。監察官が置かれるべきであろう。けれども、最初の監察官は、どこから来るのであろうか。スイスは唯一の国である。ロシア。

ルソーのカントへの影響について、バートランド・ラッセルは次のようにのべている。「カントは、ヴォルフ的解釈によるライプニッツ哲学によって教育されたが、二つの影響からそれを放棄するにいたった。その影響とは、ルソーとヒュームである。カントにとっては、ヒュームは反駁すべき論敵だったのだが、ルソーの影響はもっと深刻なものがあつた。「エミール」を読んでいる時には、規則正しい散歩の時間が狂ってしまった。カントの哲学は理論理性の冷やかな指図に抗して心情に訴えることを許容していた。やや誇張するとすれば、「サヴォアの牧師」の銜学的改訂版ともみなしうる哲学であつた。」<sup>9)</sup>

坂部恵は次のように述べている。「1750年代のカントの心の宇宙の構築を、いわば上方から打ちくだいたのがヒュームであるのに対して、ルソーはむしろそれを下方から、いわば決定的に風通しのよいものとしたことがあきらかだろう。ルソーは、1750年代のカントに見られた知的貴族主義ないしは学問至上主義とでもいうべき傾向を打ち破り、学者の看板をはずした人間としての人間の広く自由な世界へとカントを連れ出したのである。」<sup>10)</sup> ルソーに対する評価の変動はカントに連動するのであろうか。

## 2. ルソーとロベスピエール

ルソーは1778年に亡くなった。その後1789年フランス革命がおきた。「社会契約論」

は、フランス革命の大部分の指導者たちの聖書となった。しかし疑いもなくこの著書は、聖書の運命と同じように、多くの信奉者たちによって注意深く読まれることなく、まして理解されることもなかったのである。その著作は、民主主義の理論家たちの間に、形而上学的な抽象化をおこなう習慣を再び導入し、一般的意志という教説によって、指導者と民衆との神秘的な同一視を可能にした。指導者は、投票箱というような世俗的手段によって確認される必要はない、というのだった。実践におけるその著作の最初の結実は、ロベスピエールの支配であった。」<sup>11)</sup>

1789年に始まった革命は、1793年に至ってロベスピエールがひきいるジャコバン党によって恐怖政治と化した。「社会契約論」に従い、ルソーの諸説に忠実に従っていった、行きついた結末であった。

又、大革命が中間団体を破壊し、ルソーの一般意志の説によって強大化した国家と、それに直接対する個人という二極構造が成立した。(ルソー=ジャコバン型国家像)

恐怖政治はロベスピエールが処刑されたことで終わる。

ルソー=ジャコバン型国家像については、後年、トクヴィル=アメリカ型国家像(中間団体の多様な機能)が対置され、現在も議論されている<sup>12), 13)</sup>。

### 3. ルソーとベッカリーア

1762年、ルソーは「社会契約論」を公刊した。

1764年、ベッカリーアは「犯罪と刑罰」を公刊した。「歴史を開いてみよう。自由人どうし間の自由な契約であるはずの法律というものが、じっさいはほとんどつねに少数者の欲望の道具であるか、あるいは気まぐれな一時的必要から生まれた産物でしかなく、人間性の賢明な観察者——多数の人間の活動を「最大多数の最大幸福」という唯一最高の目的に導くことを知っている者——によってつくられたものではないことがわかる。

人間関係のさまざまな組合せや変化をのろのろとつづけて行けば、やがてありあまる悪で幸福への道ができるなどと期待しない国々、賢明な法律で悪から幸福への過程をはやめようとする国々、そんな国々がもしあるならそれはなんと幸福な国々だろう。だから人目にかくれ、うちすてられた書斎のすみから、実をむすぶまでに永い時間がかかる有用な真理の種を民衆のあいだにまく勇気があった哲学者——人類はどれほど彼に感謝しても、したりたということはないだろう。」<sup>14)</sup>

ここに出てくる哲学者が、具体的に誰をさすのかについて諸説があり、それが、ベッカリーアの思想上の位置づけについての論争となってきた。風早訳においては、訳者の註において、ここにいう哲学者が、ルソーであることを示唆している。しかし、同じ註で引用されているベッカリーア自身の言葉においては、これを否定している。「犯罪と刑罰」に対して一修道士の発表した覚書の第十七条は「この哲学者はジャン・ジャック・ルソーを

さす。これ以上の不敬けんな瀆神罪がほかにあろうか？」という非難をのせた。これに対してベッカリーアは「私はルソー氏がこの哲学者であると言ったおぼえは決してない。だが私は信ずる。人類に向けて有用な真理を教える哲学者たちは人類の感謝にあたいするといっても、不敬けんにも瀆神にもならないことを」と言っているのである<sup>15)</sup>。

最近の研究においては、ルソーが必ずしも、ベッカリーアに影響した中心ではないとする論者もあらわれている。「ベッカリーアは、モンテスキューを導きの糸としながら（もっとも、ベッカリーアは、モンテスキューの法の精神に導かれながら刑法の精神をつくりあげたことをめざしながらも、犯罪の問題については、モンテスキューとは異なる解決策を引き出すに至ったのであるが）、著作の基本的考え方は、グロチウス、ホッブス、ルソーに由来する示唆や考え方も加味してはいるものの、基本的には、ロックの契約思想に依拠するものである。これをルソーに求める見解もあるが、少数にとどまる。そして、その哲学的源泉は、主として、エルヴェシウスの功利主義思想に求められる。これまでの研究でこのあたりまでは明らかになっているといつてよい。残されている問題として重要なのは、ベッカリーアの思想において、社会契約論と功利主義思想という相矛盾するようにみえる思想が、彼の内部でどのように調和していたのかを解明するという作業である。」

（フランチオーニ）<sup>16)</sup> しかし、「一七六四年、チェザーレ・ベッカリーアは、モンテスキューやルソーの強い影響の下で、不朽の名著『犯罪と刑罰』を著した」（足立昌勝）<sup>17)</sup> とする論者もある。

『犯罪と刑罰』の内容からして、ベッカリーアがルソーのみから影響を受けたとは言えない。文字通り、哲学者たち（複数）から影響を受けたと考えることが妥当ではないか。そして、又、どこがどの程度までということと共に、1762年に公刊されたルソーの「社会契約論」が持っていた情熱が、ベッカリーアに、なにほどかの影響を与えたことは確かであろう。このような言い方は、理論的な記述ではないかも知れないが、そもそも、「社会契約論」は、現在においても言語の脈絡、思想の脈絡が握みにくい難解な書である。それでいて何か、人をつき動かす力を秘めているところがある。ルソーという人物、あるいは著作は、そもそもそのような体質をもっているように思われる。

ベッカリーアは「犯罪と刑罰」で知られると共に、功利主義者であり、すぐれた経済学者であった<sup>18)</sup>。

イギリスのベンサムおよびその学派は、みずからの哲学をその主要な輪郭のすべてにおいて、ロックやハートリー、エルヴェシウスから導きだした。この「哲学的急進主義者たち」の公認の指導者であったベンサムにとって、主要な関心は法律学であって、その分野では彼は、エルヴェシウスとベッカリーアとが自分のもっとも重要な先行者だと認めていた<sup>19)</sup>。

ジェイムズ・ミル、ジョン・ステュアート・ミル父子は、それぞれ独自に、少しベン



サムの考えに修正を加えながらも功利主義学派、ベンサム派、「哲学的急進主義者たち」をなした。バートランド・ラッセルは、この「哲学的急進主義者たち」は過渡期的な学派であると位置づける。「彼らの体系は、それ自身よりも重要であるところの、他の二つの体系を誕生させたのである。すなわちそれは、ダーウィン主義と社会主義とである。」<sup>20)</sup>

ジョン・ステュアート・ミルの全集のドイツ語版は、1869-80年にライプツィヒで刊行された。この全集の編集者は、ウィーン大学の哲学の教授テオドール・ゴンペルツである。このドイツ語版の全集は全部で十二巻であるが、最後の第十二巻には、精神分析の創始者として有名なフロイトが翻訳した「社会主義論」が入っている。1869年刊行の第一巻には、ゴンペルツの訳した「自由論」と、彼の友人の手になる「功利主義」と、ミルが1867年スコットランドのセント・アンドリューズ大学総長としておこなった就任演説——彼はこのなかで大学における広汎なりベラル・エデュケーションの重要性を説き、「大学の目的は練達した法律家や医師や技師を作ることにあるのではなく、聡明にして教養ある人間を作ることにある」とのべている——との翻訳が入っている<sup>21)</sup>。

ドイツ語圏における新しい自由主義の抬頭の時代をむかえつつあった。

## 注

- 1) チェーザレとチェザレの二通りの読み方がなされているが、いずれが正しいか現在の私には判断できない。
- 2) 馬場昭夫「ジャン・ジャック・ルソーとチェーザレ・ベッカリーア」暁星論叢第35号129頁以下(1994)
- 3) 市井三郎訳

He is the father of the romantic movement, the initiator of systems of thought which infer non-human facts from human emotions, and the inventor of the political philosophy of pseudo-democratic dictatorships as opposed to traditional absolute monarchies. Ever since his time, those who considered themselves reformers have been divided into two groups, those who followed him and those who followed Locke. Sometimes they cooperated, and many individuals saw no incompatibility. But gradually the incompatibility has become increasingly evident. At the present time, Hitler is an outcome of Rousseau; Roosevelt and Churchill, of Locke.

- 4) 福田歙一『ルソー(人類の知的遺産)』年表
- 5) 浜田義文編『カント読本』6, 7頁
- 6) 『カント全集第十六巻』(尾渡達雄訳)(理想社)
- 7) Es ist eine Beschwerde vor den Verstand Geschmack zu haben. Ich muß den Rousseau so lange lesen bis mich die Schönheit der Ausdrücke gar nicht mehr stöhrt u. dann kann ich allererst ihn mit Vernunft untersuchen.

(Kant's Gesammelte Schriften. Herausgegeben von Königlich Preussischen

Akademie der Wissenschaften. Band XX 1942)

- 8) Ich bin selbst aus Neigung ein Forscher. Ich fühle den gantzen Durst nach Erkenntniss u. die begierige Unruhe darin weiter zu kommen oder auch die Zufriedenheit bey jedem Erwerb. Es war eine Zeit da ich glaubte dieses allein könnte die Ehre der Menschheit machen u. ich verachtete den Tzöbel der von nichts weis. Rousseau hat mich zurecht gebracht. Dieser verblendende Vorzug verschwindet, ich lerne die Menschen ehren u. ich würde mich unnützer finden wie den gemeinen Arbeiter wenn ich nicht glaubete daß diese Betrachtung allen übrigen einen Werth ertheilen könne, die rechte der Menschheit herzustellen

(注7)に同じ)

- 9) バートランド・ラッセル (市井三郎訳) 『西洋哲学史』 697, 698 頁  
10) 坂部恵『カント』88頁  
11) バートランド・ラッセル (市井三郎訳) 『西洋哲学史』 693, 694 頁  
12) 樋口陽一「第三章フランス革命と法 第一節フランス革命と近代憲法」長谷川正安他編『講座・革命と法第1巻市民革命と法』130頁以下  
13) 松井茂記「1. 国民主権原理と憲法学」山之内靖他編『岩波講座社会科学の方法第VI巻社会変動のなかの法』34, 35頁  
14) チェーザレ・ベッカリーア (風早八十二・風早二葉訳) 『犯罪と刑罰』19, 20頁  
15) 同上 20頁  
16) 東京刑事法研究会『啓蒙思想と刑事法』3ベッカリーア研究の現段階 (京藤哲久) 79, 80頁  
17) 同上 12ドイツ・オーストリアの啓蒙主義刑法理論と刑事立法 (足立昌勝) 301頁  
18) シュムペーター (東畑精一訳) 『経済分析の歴史I』372頁以下  
19) バートランド・ラッセル (市井三郎訳) 『西洋哲学史』765, 766頁  
20) 同上 772頁  
21) 杉原四郎『J. S. ミルと現代』130頁以下